



林妙
話作
七
編
人
初
編
下

1 4
3157
50(3)



14
3157
50
(3)

林話七偏人初編卷之下

東都

梅亭金鷲編次



林話

再説喜流布が家る能樂きあひ茶も若下を仰虚長
 松の三人がは活きるとい女性竹嵐の吹し後のもく寂寥と
 なるそわわと裏口の戸を扇落裡と胸不鳥をなを思ふ
 ちす思ふ今にか密さぬがは為今には悟道と云々実出は
 蓋の酒の者不喜流布の首を傾げて子誰さうう一鼓地う

飛ハのうもサ生刺を振ふるをいひて居らるる「彼奴等」に
あてりテト氣張名をなむやア代の船合が出来たりといふ
る「やアと存とのふま笑つれで懐の船合がよヲんやると
成と奴等の口が連下あごつて来て彼等や否と此等やのや
と云々」の船でもせんとと産取の隅へ進んでをさのり
「さう思ひのりて来さりののるんと利身に意氣にシテ鴻を
蓋ととり「白鳥に生海若貝のそらに萌一ニツ葉も此
代孫の網合あり」トく代孫の網合をツラのせてをを網の

中へ指と突とこマツヲウ熱うらこコチ何程しこのごそん
汁のめろ入手とつこむやのかまのう「左様ゆいけとど判
り」オホ意者網をうりちやア淋しいと格のえと焼着てか
不つろふも流さつりのごすこもあかぬ程と身と由辨の
酢のりのごぬさあひ並ねるといふ潮やとつふ春をいさうい
のまうりもあひはえと云うけをまうりめのごけかへつと味
汁をほけるのごヲヤ大平をことの「エサあつとこの何のるん
人の知事をもぞの御門のかり合とさうそらうりけ方へて色

ちやまう ちやまう ちやまう ちやまう ちやまう
茶めまとのへは是サ茶めまの友返輝とまの人のごとく
ゆきの雪陣の中よりちのさる声あてかまのまに
たをさる声で自己が名を呼みい退き来と奴等がまを
まて居り人みでもねへてのあても息が切て咽喉が乾付
まうと茶でも湯でも浪とたまさるのま一盃おて来て
一アレ彼振るまるとわアが「ア」君死な雪浪のま湯茶
まをまぬがあるまのういとまをばて春次第の腹を七が袖を
引目で知らせ「ま」ま中編う編のまらまらまら雪浪おて

ちやまう ちやまう ちやまう ちやまう ちやまう
のつえま人も宜ぢやア後人久た振サ「ア」茶めまの天敵
油揚の橋上りのちやア何れぞ「ア」ままのてまか
瓶もも化さまのつる雪陣の中を咽喉のわりのこのまを振か
りのがゆるるの「ア」まま二人の顔を見合せま「ア」小声
まら「ア」彼方でも自己達のまを化されんちやアねえ
まら「ア」彼方でも自己達のまを化されんちやアねえ
茶とまの湯とまの「ア」飲まらまらと砕礫の瓶を
「ア」瓶サ着後引の瓶を「ア」まらまらとまらまらと「ア」袖の振るま



まごころ世処とてみすとい出来ねトのふのどつてらるるに
かびやアグのこころ振出さく、出ア何防まても、運入て
指さるート云まるト亦出城を仕てるるやのヨト云るる
雪隠のふとぬ顔を出し「をア」馬け所希をアおねん
ご人おあゝ骨をわせやアグのて「自己ア違せえ来るざらト
あつて美おれとのもちがさ彼振安くと、ぬらうとい白ちりの
云るるる度愛の方へ佳んとする夜「身を洗のねのうい」
うて只指勢とさうりごめと「指勢ととつて襟ねやイ

「チヨウやうまうい百成勝負とぞト不生、養生に身を洗ひぬ方
へ来まば「アアどうく城う出うけと「まつもやア軍が茶め
かめへの引柄例ーと男のけ処の長屋の家をさるごととヨ下
たごーと二人で寝云とつて、ぬーへの来とけとどかあも云
て居ち弟ア能ねん喜云さん不連て、性て黄てあやまのて来
る各人「子三史ちやアあの源云清さんの屋とや、区とある
振サその源云清さんとのサ、のさ、のるで、毎々さんご上、
けとどのウ「史ちやアるん不彼人が、気が、正とつて、お捨ちやア

金ねんそく 此処不任んで居る 程の夕一刻ゆ子の宜多
 一お不仕へ来るうう歩りる多入「何指ととんごつまうわ
 りと、云とよめご「何友と「史ごといつて款の城垣へ踏んて
 第一和音の破きと目おやア帷幕のうらうら伏勢が起つこ
 り城の外不落一穴が考とる志をうんせ入所修羅王へ馳
 子奮奮ちんの符と名悪先難刺へ三面六臂の鬼神と見え
 小樹とてく「款の大勢味方の一人あむおあひ二台とりのご
 のヲ防禦の伎術があるあちやアねん「ナサく款城へ踏

あんぞる破隊お及んごう縁の腰に用ゑの山八烟
 子の煙のととあげると官史と相違ふ味方の負勢負
 むごの機ととみへ肩おるげうけ負の淋方火の車
 おとまりのあさるる袖子既の兜と猪首おとせ困せ
 丸と号けける経流代のた刀と横へ借金の利息とこの
 将小判と云延三年竹の証矢と云理のどく負大倅
 借利流文の加中入張の流らと款の皮の籠と極と
 お振う家のおの瘦た麻毛へおんらうと巻んのかんらうと

うらつり うらつり 八百人の負年とあ後左に引きたて七
偏人等二編引つた賣出と書する大旗と書す樹
橋の船風小翻藩とひらぐ一案内知る路の細
道者連う溝板と勇まふいこんで瑞葉は大手の
つ橋子先をどき落の堰際までひくと推高ふ
却合ふかるう調子側ふありする年玉の万葉府
とひらの大太神のうちを教さるるおろし表が尾落
禮の友「サク」お青のお密さるがあのゆるすつと「お青

のお密さるごア誰ぞく「花分政助のうらま」左様う
そんまう一たん驚うてきる人名ト云うまに運入台の
障子の蔭ふかくまてあると知るむ風長の中みん
茶め香ふ引とて進家玉の源を清け表とさや
里かり下右布が扇をひつて教さる立志を言とて笑講
袴が下下りするると心ひ大の講話好む安月も
うくより来り「イヤお免るさかい障子とあける教とてん
人喜次神とどめとてく花分政助といひの好茶お

吾がことあらんと察しちうとんて可ハ源玄茶さん共
此方ら下とるぐう陰の源玄茶さん共
月まぎせりて初とまきと茶の香の飛分政助の
源玄茶が香飛とまきだたのうんするそのとん
まて肝と洗し一日常茶とて懐かざるその煎とん茶
ゆ香の作天一突出するよとよりやより亦振ま

うらマアママアアアアアアアアアアアアアアアア
まかんくまかんト大の吹る美似とまきとん茶
山一舟の雲陸人遊まんぐり源玄茶の是とんてあ
けふとこれやとんてくまて飛る四人の香の吹とん
アの開笑やとまきとんて奥歯の歯とめくまきとん
とんて飛るが香の飛るひと飛んてやん
おととととととととととととととととととととと
朋友ととととととととととととととととととととと

何れのみ理屈を知らぬものか 断片のちのこあるものか
あつて私にほどをたてよまきうう 十二廿七を君へ倍札に
つきて来らうとのので 此度のますへさう お長屋の仍
ゆい 今月のおあさんうやく 四苦骨子たん 十二廿七 長
屋うちのことこの 此度のますへさう 刻湯の中でおま
さん 夫れとて 今亦人遠でおあさんと
うと男で 此度のますへさう 人物と倍札ふ 十二廿七
イヤ 別段に 挨拶おあさん 此度の風情うう

何れのみある理屈を知らぬものか 断片のちのこあるものか
あつて私にほどをたてよまきうう 十二廿七を君へ倍札に
つきて来らうとのので 此度のますへさう お長屋の仍
ゆい 今月のおあさんうやく 四苦骨子たん 十二廿七 長
屋うちのことこの 此度のますへさう 刻湯の中でおま
さん 夫れとて 今亦人遠でおあさんと
うと男で 此度のますへさう 人物と倍札ふ 十二廿七
イヤ 別段に 挨拶おあさん 此度の風情うう



げんせい
のまひ
けふ
ふたき
それど
くま
ふたき
ふたき

ふお賣うりとてひのそと山やまのかりまのせう飛八「とんぶ
段助だんすけの彼等かれらのけけいぬたれと中なかつにやうて
るりあはとおさるるナ「左ひだりにまかようま
ひるるイヤ十三喜き派はの先まへの初はつ花はなやへ中なかつ付つ山やま海うみ
の味あじと美うつく上うへにさるるさう空そらてまつてひるるら
「也な何なにも先まへ初はつ美うつくのこまとさるる四人よにんの先まへと
かもぐく喰くひいめ入いれあさるりの砂すな「並ならはさるる花はな不ふ
ひるるます「正ただ美うつく「しひね入いれせく「志こころとさるる
飛八とびやち

ぐくとまふかまの喜き派はが下したと云いて驚おどろろろ「る連つらのと
サく「定じやう地ちさるる「執しやく念ねんのかり「廣ひろ蓋がさと出でるさ
「下した水みづ糸いとと「運うんへナ引ひハイ里りの馬うまアでも載のがナ
引ひえつとやのさるるやさるる「年としのぞく「子こイと見み傾かたむ
てりくと難なんさるる「端はなの冷ひやさるる大おほ沖おほへ掛かるるさるる
是こゝろより七しち人にん歩あゆ圓まる飛と跌たふ不ふと食く不ふと敗たふ女に花はなハガ
持もきさるる二ふた様さまの「そまもち花はなとるる「坂さかの「るの「隅すみふ
さうげ廣ひろ蓋がさの上うへへ入いれあさるる空そら然しかるる「脱だつふと

